

啓光だより

発行元
社会福祉法人啓光福祉会
東京都摩市和田一七七七
〇四二一三七五 七三〇三

今年の夏祭り事情

啓光福祉会では毎年、地域の方々と一緒に夏祭りを企画・実施しています。

今年は、あいにくの天候が続き夏祭り当日は、啓光えがお、啓光学園ともに雨に見舞われました。

それでも利用者が楽しみにしている夏祭り、それぞれの事業所で工夫を凝らしました。

啓光えがお

からきだ夏祭り



開催前日の八月十九日は快晴で、準備にも力が入りましたが、当日は朝からまさかの大雨となっていました。

昼からは天候が落ちていくとの情報があり、また、何より皆さんに少しでも楽しんでいただきたいという思いで、内容を一部変更の上開催するとの決定をいたしました。

利用者の皆さんが会場に到着さ



れたところには何とか雨もやみ、空には晴れ間も見えました。地域の方々も多数お見えになり、皆様には会場で楽しくお過ごしいただけたことと思います。

啓光学園

新堂公園夏祭り

台風と大雨に見舞われた今年の夏。八月二十七日に予定していましたが「新堂公園夏祭り」も、開催当日は朝から雨が降り、雷注意報も発令され、残念ながら中止といたしました。

毎年、啓光学園と地元自治会宝蔵橋睦会との共催で、新堂公園で開催している夏祭りです。

今年は、太鼓、よさこい踊り、バンド出演や多くの模擬店を計画し、



前日から暑い中、新堂公園内に舞台やテント設営を行い準備万端整えておりましたが、当日は朝から雨が降り続けましたので、啓光学園内で小規模な模擬店を行いました。



学園内で好み焼き

近隣の特別養護老人ホーム愛生苑の職員の方々に好み焼きを振舞って戴きました。自家製のお好み焼きで、特に粉に拘っておられるとのことでした。言われる通りとても滑らかな舌触りで、利用者は何回もお替わりをしておりました。本当に有り難うございました。啓光学園職員も自慢の焼きそばづくりに腕を振るいました。

平成二十八年事業進捗のご報告

啓光学園

支援をより利用者本位に近づけるべく、全体の支援方針を年度の初めに掲げ、支援環境の改善に取り組んできました。

現時点までの具体的な取り組みとして、ひとつは言葉を持たない、あるいは意思表示を不得手とする利用者が日常生活の中でより多くの選択肢の中から自己決定が出来るよう情報提供方法への配慮・工夫を行ってきました。職員で構成するサービス向上委員会にてアンケートの実施と分析を行い、支援方法の検討を重ねてきました。

その結果、自己選択と支援者側からの提案を行うツールとして、コンビニやスーパーなど外出先の絵や写真を載せたカードを作成し、外出の誘い掛けの際に提示しています。あわせて当日勤務職員の顔を写真をシフトごとに貼り出すなど、情報の可視化を進めています。

職員力の向上に向けて

利用者それぞれの障害特性に対する理解や対応、コミュニケーション



ション方法の確立や利用者に対する際のマナーなど、職員の専門性の向上の為、虐待防止委員会によるセルフチェックを毎月行い、職員それぞれが自身の支援態度や対人マナーを振り返る自己点検を実施しています。そこで得られた結果をその月のテーマに掲げ、更なるサービス向上への課題として活用されます。

そして、利用者一人ひとりに対する支援を多角的な視点で捉え、利用者のニーズに沿った支援を組み立てる為、職員をグループ化し、

これまで各職員がひとりで行っていたそれぞれの担当利用者の個別支援計画の実施・点検を支援チームで実践できるようにしました。

それに合わせ、毎月のモニタリングもサービス管理責任者とグループ職員で行い、情報共有をしやすい環境作りをしています。

今後は利用者支援に対する考え方を議論する機会を重ね、職員の専門性を高めてより精度の高い支援を提供できるよう引き続き努めて参ります。

なかまの樹

利用者一人ひとりが様々なことを体験し、仕事を通して社会参加し、一日いちにちが楽しく充実した活動になることを軸に日々の活動を行っています。

今年度始めから現在にかけて、新規作業の開拓や自主製品の開発、展覧会出展用の作品制作等に努めてきました。その取り組みのひとつとして敷地内花壇での畑作業を導入しています。利用者と相談し、まずはミニトマト栽培から始めました。日々の世話から収穫、販売まで携わっていただき、実際に売れる様子まで見て頂くことができました。

仕事を通して得た利益は給料として利用者に還元され、仕事に対する励みになっています。

自主製作品に関しては、木片と金属棒を擦り合わせることで鳥のさえずりの様な音のでるバードコール、別名鳥笛という製品を製作しました。完成後になかまの樹印の焼き印を入れてオリジナルティを加えています。

そして職員利用者一丸となって取り組んだ美術作品「伸びていこうとする木」は第三十一回東京都障害者総合美術展にて入選を果たしました。利用者の発案から実現した作品で、ねじった針金を組み合わせ木を表現した作品です。



毎日の充実した生活のために

一連の作業に於いて、補助具の使用は不可欠となってきました。利用者の視点に立ち、どうすれば使い易いか、注意すべき点は何かを考えながら補助具の制作にあたっています。障害の重さに関わらず、それぞれの利用者が出来る事や能力を引き出すことを心掛けながら日々の作業に臨んでいます。

なかまの樹ではこれからも利用者のニーズを捉えた上で、より多様な作業や活動の機会を提供し、社会参加を実感して頂ける支援を実践して参ります。

啓光えがお

利用者の皆様にとって当施設が「働く場」「楽しめる場」「休める場」という三つの側面でお役に立てるように支援を進めています。

まず、「働く場」としては、自主製品の開発を進めた結果、商品の種類が大幅に拡大し、利用者が作業に携って頂ける場面が増加しました。また「多摩市障害福祉ネットワーク」また「多摩・府中の障害福祉事業所との共同受注などの活動、さらに、地

域のイベントを通じて形成してきたネットワークが成果を生み出し、取引先の開拓が進み、現在のところ検討段階ではありますが、大学との協業などに繋がり、活動の幅が広がってきました。

次に、「楽しめる場」としては、施設内でのイベントや外出を職員の企画・立案のもと実施しています。昨年後半より開始した、休日の地域の催事への参加支援も定着し、多くの皆様にご利用いただくことができています。

そして「休める場」としては、単に作業の傍ら休息をとっていただくという意味に留まらず、体



緊張緩和の実施、必要に応じての通院支援、緊急度に応じた日中一時支援の時間調整などで、施設が皆様の生活のバックアップをし、日々安心してお過ごし頂けるような取り組みをすることを「休める」という言葉で表現しています。

「当たり前のこと」を大切に

これらのことを円滑に進めていくためには、職員一人ひとりが利用者に対する理解を深めていくことが不可欠です。そのため、支援

当法人では、平成二十八年四月より虐待防止委員会を設立し、直接的虐待の防止と、虐待に対する意識の喚起を行っています。

これまでに「虐待防止・虐待対応マニュアル」、「職員用虐

虐待防止委員会

4月より活動中

待防止セルフチェックリスト」の作成を行い、使用しているほか、外部講師による研修会の開催を行いました。また、利用者・ご家族・第三者委員に協力を戴き、「サービス満足度に関するアンケート」を実施させていただきました。

虐待防止についての取り組み

の基本となる「情報収集、支援計画立案、支援の実施、支援経過の観察、成果の評価及び支援の見直し」という一連のサイクルが定着するように、各種書類の改廃や会議方法の見直しなど、日常的な業務についても改善を進めています。

今後とも啓光えがおでは、利用者さんの安全確保や、施設の活動の中で楽しさを感じていただくために、ごく当たり前のことを当たり前に提供できる施設となるよう努力して参ります。

きました。

毎月実施している職員虐待防止セルフチェックの結果は毎月の会議ごとにデータ化し、職員間で共有して、人権侵害が起きない環境の整備と、問題が見られた場合の状況改善に取り組んでおります。

当法人では、今後とも利用者の皆様が安全に楽しくお過ごしただけるよう、サービスの向上に努めて参りたいと考えております。利用者・家族の皆様にご協力をお願いすることもあるかと存じますが、活動へのご理解を賜りますようお願い致します。

アンケート実施

将来の生活の場

地域のニーズに応じた事業展開を計画していくうえで、福祉サービスに対するニーズ調査を実施しました。今回は、多摩市在住の知的障害当事者とそのご家族を対象に、将来の生活の場の課題についてアンケートによる調査を行いました。

当事者の約九割の方が、生まれ育った多摩市で生活を希望されており、うち四割の方がグループホームでの生活を望んでいました。

七割が希望

グループホーム

ご家族の方の七割もグループホームでの生活を希望しています。中には、親亡き後にグループホームに入った場合、どこまで任せられるかが不安。入所施設であれば安心、という意見が多くありました。このことから、グループホームを用意するだけでなく、当事者の方にもご家族の方にも、サービスメニューを分かり易く情報公開することが重要であることが分かりました。

この他にも多くの課題が見えてきました。当法人のみでは解決に至れない課題は、他の法人や多摩市と連携し、多摩市が住み良い街になるよう貢献していきたいと考えています。

三か所目を建設

グループホーム整備とその課題

啓光福祉会が運営するグループホームは、平成十七年四月に定員五名（女性向け）でスタートし、二十年十月に定員八名（男性向け）を整備致しました。今年度、法人として三か所目のグループホームとして定員七名（女性向け）の整備に取り組んでおります。多摩市内では、ここ数年グループホームの整備が進んでおりません。適当な用地や物件の確保ができない、地域の理解が得られないなど課題はいろいろあります。

このような地域事情の中で、啓光学園（入所施設）の隣地にグループホーム用地をお借りすることができ、地元自治会の皆様のご理解も得ることが出来ました。

現在、新築工事入札手続きに着手しており、来春の完成を目指しております。

入所施設から

グループホームへ

全国的な動向として、入所施設から地域生活への移行が進んでいます。平成二十〇二十七年の入所施設とグループホームの利用者推移を見ますと、入所施設は九%の減少、グループホームは百二十八%の増加となっております。その利用者割合は、グループホーム利用者が入所施設利用者の七十三%を超える状況となっております。



今後の課題

今後、施設入所者や家庭で介護を受けている方々が利用できる、介護付きのグループホームの必要性が、益々高まって来るものと思います。

これらの切実な需要に対して、用地や物件の確保並びに職員体制の整備など課題は多くありますが、社会福祉法人として求められる障害者支援の方向に沿って、取り組んで行く必要があると考えております。

編集後記

この広報は、啓光学園と啓光えがおより編集委員をそれぞれ選出して作成しています。委員はそれぞれ勤務時間や場所が異なるため、作成にあたっての情報の交換や共有にはコンピュータネットワークを活用し、直接顔を合わなくても業務を遂行できる体制をとっています。

仕事をするうえでこのようなことはもはや当たり前となっています。時代の進化を感じずにはいられません。

（広報編集委員会）